

タ リ タ ・ ク ム

“Talitha, koum”

「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」(マルコ5:41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第 8 号

2008年1月25日

発行人: 吉谷かおる

「血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく」
(ヨハネによる福音書第1章13節)

司祭 上田亜樹子 (ハワイ教区)

「へえ～、女性のチャプレン(牧師)ですか? 珍しいですね。」とまだ言われながら、日本聖公会法憲法規司祭志願者の「条件」から、「男子であること」という文言が削除されて早10年が経とうとしている。つい10年前までは男でなければ司祭になれなかったのに、「性差別」は始めからなかったしもはや問題でさえない、というような言い方をする人には結構まいる。でもそういう一方で、自分の身を守る為だったり、より楽な力関係に辿り着きたいといった極めて次元の低い動機がモトとなり、気がつかないうちに「性差別」状態の緩和に、必ずしも積極的でない自分を見出すことがある。

たとえば、私にとって意味のわからない表現の筆頭として「女性の視点を大切に」というものがある。発言した本人は、たまたま「女性」である人の言い分も「大切」にしよう、と言うつもりだったかも

しれないが、人としての個性を大切にするのはではなく、人間としての中味ではなく、シゴトの内容でもなく、だからといって取り組む姿勢でもないとなると、女「性」の視点ということでひとくくりしている内容はいったい何なのか。わざわざ「女性の視点」と呼び、回復させなければならない隠されたものは何なのか、本来の生き方を「歪めている力」は何なのかという議論なしで、キッチンの使い勝手やら新素材の心地良さなどの話題の中に出てくる「女性の視点」は、なんだか気をつけようと思うのである。

次に登場する意味不明発言には、「お互いにとらわれない方がよい」というのがある。つまり差別なんていうのは良くないから、えこ鼻屑しないためにも、すべての違いに目をつぶって画一的に対応すれば、差別をしないで済むはずだという考え方である。「差別」を無視し認めなけ

れば、差別と無関係でいられるという立場、ひょっとすると、差別や不正は「気のせい」(?) という立場なのかもしれない。しかし、今ある姿、置かれた実際の環境に目をつぶって、いったいどうやって目の前に今を生きている現実の「人」と出会えるのだろうか、私は絶句してしまう。

人々は「いや～、もっと女性司祭の数

が増えるといいですね」と善意で言う。確かにそうかもしれない。しかしまあ言うまでもないことだが、数合わせではなく、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、「神によって」自分の生きる道を見出し、またそれを阻害する様々の要因を超えて責任的に神に呼応する関係を求め続ける私たちでありたい。

*** 女性の「ハラスメント」は ***

司祭 橋本克也 (横浜教区)

日本聖公会総会で「女性の聖職按手」が実現されたことは大きな喜びでした。司祭は男性に限るという伝統に押し込められていた男性と女性の差別的な偏見から、日本聖公会が変えられて、新たに福音を世界の聖公会と共に歩み出したからでした。しかし、今日の日本聖公会の実情は果たして偏見や差別的関係から解放たれつつあるかということ、賛成、反対の互いの頑なな対立関係が生じてむしろ行き詰っているように思えます。

日本聖公会総会で設置された「管区女性デスク」などの熱心な働きによって、何が問題であるのかをさまざまに提示されていることは、聖公会にとって大変貴重な働きです。ことに「ハラスメント」の定義を「ハラスメントとは、さまざまな『力関係』に伴い、言葉、態度、行為によって他者を継続的に脅かす心理的・

身体的・性的な暴力であり、人権を侵害する行為を指しています。とくに加害者は『自分にはそのつもりはまったくなかった』と主張する場合が多く、それによって被害者は、周囲の無理解による『二次被害』を受け、何重にも傷つくことになります。」と示されたことは、大切なことであったと思います。

私は、今まで「セクハラ」について正面から問うことには、敬遠して、いつも男として後ろめたく感じ、どこか抵抗をもっていたのだと思います。「セクシュアル・ハラスメント」とは、女性が被害者になって、男性が加害者になってしまうのだという思いです。社会的あるいは歴史的状況にはそのような関係と問題が確かにあるのだと思います。しかし、女性が圧倒的多数の日本聖公会の教会では、「ジェンダー問題」について、また「セ

クシュアル・ハラスメント」についても、女性にもっと真剣に問いかける必要があるのではないかと思います。女性が、「女性が加害者となるセクハラ」について話し合うことは、どれくらい突っ込んで問い合われているのでしょうか。女性の聖職の問題だけでなく、女性が多数の教会にあって、男性、女性の働きの有り様が叫ばれながら、やはり一部の声に止められてしまっていて、なおどうしても教会が創造的、自立的になれない状況を多くの女性が問い直し、取り組み、協働して行くことが、今こそ大切な時であるのだと思います。社会生活では自覚し、自立的な生き方をしながら、教会の生活では閉ざされた生き方に陥っている女性です。それは、多くの人々に失望を与えてもいることでしょう。

キリスト者としての福音に生きる生き

かたとは、人の欲によって、利己心から生じるさまざまな偏見や差別に、自ら気づかされ、そこから解放されようとする生きかたへの取り組みでしょう。いわれの無い偏見や差別をされている人々がその苦痛と困難から解放されることは福音の重要なことです。しかし、キリスト者にとって、更に大切に貴重なことは、偏見や差別をしていることを自らが自らに発見し、認めて悔い改めながらひとつひとつ解き放たれてゆくことであり、これこそが「福音」の喜びに生きることであると言えるでしょう。最もふさわしくない私に、私たちに、「神の子」である資格を神が与えてくださっていることをクリスマスのメッセージとして私たちは共に受け取っているのです。

平和への旅 ベトナム・カンボジア
岸野真理子 (横浜教区)

2007年9月、私服のシスターに紛れこんでベトナムとカンボジアを訪ねるといふ、またとない機会をいただきました。ご存知のように両国はともに哀しい歴史や悲惨な戦争を経て今日に至っています。両国の戦争や内戦の傷跡をたどりながら、現在の人々の生活、そしてそこでのキリスト教会やNGOの働きを、ほんの一部ですが見てきました。

私たちはまず戦争証跡博物館やツールスレーン刑務所跡地、Killing Fieldなどを訪ねることで戦争によって破壊されたものの大きさ、人間の残酷さを思い知らされました。また、ベトナム人のガイドさんはかつてベトナム兵としてカンボジアに出兵したと語っていましたし、神父の遺体のあった場所へ案内してくれたカンボジアの男性は当時クメールルージュ

の少年兵だったと思われました。そして貧しさをそのまま次の世代に引き継いでいくしかないこと、ベトナム人とカンボジア人の微妙な感覚の違いなどなど、人々にとって戦争や内戦は今なお現在形で残っていると感じました。それは戦争で破壊されたものを取り戻すことがいかに困難か、を思い知ることにになりました。

その一方、笑顔を向けてくれたたくさんの人たち、子ども達に出会い、子どもたちと共に歩んでいる日本人がいることに、平和への歩みと希望を見ました。

希望として心に残っていることの一つにゴミの山で生活する人たちによる屋台村オープンがあります。カンボジアの首都プノンペンから車で20分ほどのステンミエンチャイ地区にアジア最大のゴミ集積場があります。すでに収容量は限界とも言われ、2010年に新しくゴミ集積所ができる予定で、その時点で現在の集積所は閉鎖されます。新しいゴミ集積所は立ち入り禁止になり、現在ゴミの中から金属やペットボトルなど換金できるものを拾って売って生活している人々(子供も稼ぎ手で、それが学校へ行けない一因です)は収入源を失うこととなります。そこでそれに代わる収入源として、屋台を貸し出すプロジェクトをカトリック教会のグループが立ち上げ、いよいよ開店の運びとなりました。ゴミに頼らない生活を目指して、ゴミによって生活していた11人が練習を積み重ね(このこと

が日銭を稼ぐ彼らにとってどんなに大変なことか想像ください)、4台のロツティー(クレープに似たお菓子)の屋台がオープンしました。幸運にも私たちはその開村式に立ち会い、おいしいチョコバナナ入りのロツティーを試食させていただき、祝賀の席をとにもすることができました。



その後うまく収入を得られているか、心配していましたが、屋台は11台に増えて近くの縫製工場前などで順調に収入を得られるようになってきたと聞きました。近いうちに人口の多いプノンペンに出店予定とのことで、働く人を増やし屋台を100台にしたいと希望をふくらませています。多くの人々がゴミ拾い以上の安定した収入を得て、子供たちが学校へ通えるようにと願わずにはられません。

数ヶ月たった今も、子供たちの笑顔と耀く瞳が目には浮かびます。字を覚えようと日本人の開く小さな学校へやってくる子供たち、幼い弟や妹の世話をする子供たち、地雷で傷ついた子供たち、車を追って走ってくれた子供たち、たくましく働く子供たち、そして湖の船の上で一生

を過ごすであろう水上村の子供たち……。その子供たちが元気に幸せに大人になることができますようお祈り下さい。そして現地の人々と現地で働く日本の人たち

へのサポート、スタディツアーへのご参加もお待ちしています。このツアーからわたしは平和への新たな旅に歩み出した思いがしています。

スリランカその後……………吉谷かおる (神戸教区)

2007年11月22～25日、スリランカで初めて開催された女性会議に、女性デスク木川田道子さんとともに参加しました。「姉妹なのか？双子か？」となぜかよく訊かれた私たちの道中はなかなかスリリングなものでしたが(政情不安のためではなく迂闊さや語学力の問題で)、皆さまのご支援とスリランカの人たちの親切に助けられ、たくさんのものをいただいて無事に帰ってまいりました。物心両面でのお支えによって送り出していただいたことに重ねて感謝申し上げます。昨年12月発行の『管区事務所だより 第223号』に掲載された木川田さんの報告と一部重複しますが、こちらはそのB面ないしは後日譚としてお読みいただければと思います。

スリランカ滞在中は自由行動が許されず、コロomboの「生ける救い主大聖堂」と、私たちの受け入れ先である Malini Devananda 司祭のお宅を往復するのみで、一瞬もインド洋を見ることはなく、市場をのぞいて人々の生活を想像することもできなかったのですが、私にとっては楽しく新鮮なことばかりでした。限られた

見聞であっても、帰ったら女性会議の収穫だけでなく、スリランカとそこで出会った人たちの魅力をお伝えしたいと思っていたのです。ガイドブックのようなことを言えば、「光輝く島」スリランカには、世界遺産の指定を受けた史跡(6)と自然保護区(1)があり、美しい海岸、多様な野生動物を育む熱帯雨林といった環境にも恵まれ、本来豊かな観光資源を保有する国です。しかしスリランカ、ときいたら「象！象！」「紅茶！紅茶！」と連呼するような私の友人たちも、内戦と津波のことは知っているのに、今回は「大丈夫なの？」とずいぶん心配されました。実際出発前に LTTE(タミルイーラム解放の虎)の指導者が政府軍の空爆で死亡するという事件があり、不安の中での旅立ちではあったのですが、現地では何度か検問などで緊張する場面はあっても嚴重警戒とまでの印象はなく、スリランカの人たちの笑顔にすっかり魅了されたこともあり、「危険な国」というイメージを払拭できれば観光立国がもっと成功するだろう、私もチャンスがあればまた来たい、今度はあれもこれも見たいし…、と思い

ました。

しかしその後状況は一変、帰国後すぐにコロンボでの自爆テロのニュースを耳にしました。テロの頻発により、12月下旬までに300人近い死者が出たとききまず。戦闘やテロについての情報も、政府側とLTTE側では大きく食い違うので信頼性を見きわめが難しいのですが、一般市民を殺傷するテロはなかったというこれまでの事態が大きく変わったのは事実のようです。年明けのスリランカ政府による停戦合意破棄決定を受け、停戦監視団の撤収が開始されて以来、連日のように戦闘の激化、爆弾テロについての報道に接しています。今回訪問を断念したNGO、TECHJapanのあるバブニヤの状況は現在どうなのか。代表のカクチさんとその縫製トレーニングセンターに集まる女性たちは無事なのか。また北部の状況を詳しく教えてくれたS.K.Daniel司祭が働き場としておられるキリノッチは、停戦合意が失効する1月16日以降LTTEの拠点として大攻勢をかけられる可能性が高いと報道されています。Daniel司祭とご家族、彼がチャブレンとして預かる大勢の子どもたちは安全に避難できるのか。心配でたまりません。女性会議の開催時にはLTTE支配地域の北東部の教会からも参加者がありましたが、時期が違ってれば私たちも日本から行けたかどうか、開催したい難しかったかもしれないと思うと、あのときのことがますます宝物のように思えてきます。

実行委員会にあたる Board of Women's Work (BOWW)の方によれば、女性会議の開催を企画した目的の一つは、公的な場面で発言する機会が少ない女性に場を設けるため、とのことでしたが、多くの参加者がコメントを述べるときには率先して堂々と語っておられたし、歌やダンスなどへの参加も積極的で、明るく活発な女性たちなのではとの印象を受けました。スリランカは民族紛争に悩む国ですから、「新しい人間性に向かって」というテーマがもつ重みはもちろん感じられましたが、日本で開催された第1回女性会議と比べると、食事やおやつタイム、リクリエーションなどで「楽しむ」という要素がより重視されているように思いました。戦闘地域や遠隔地からの参加者を含め、仕事や家庭の事情にやりくりをつけて参加した人たちが多いことを思うと、大都市コロンボの大聖堂を訪れ、仲間たちとリラックスして時を過ごすことには、私が想像する以上の価値があったのかもしれない。自由時間には私たち「日本からきた姉妹」との写真撮影希望者が多く、帰国後に写真を送ろうにも誰が誰だか整理がつかなくなってしまうほどでした。会期中に3人の女性司祭の方々にインタビューしたり、女性の社会進出や男性とのパートナーシップについて調査したりすることができるよかったです。残念ながらその余裕はありませんでした。知りたいことがたくさんあるので、これからはEメールを通じてスリランカ

の女性たちとのつながりを大切に、平和を求める祈りをともにしていきたいと思います。

長身の Chickera コロンボ教区主教は女性の働きにおおいに期待し、女性司祭を120%サポートしておられる方ですが、デング熱に罹患して病状が心配されていること、大聖堂の広大な敷地の一角に飼われていたポニーや垂れ耳の不思議な山羊は環境プロジェクトの一環であると後日判明したこと、女性会議2日目の夜には「なんとかさん(女性名)にお魚をあげよう」という歌を皮切りにみんなが踊りだして突然交流歌合戦(?)が始まり驚いたこと、発表するタイミングを逸した幻

のスピーチ、帰国のため空港に送ってもらった車の中で Malini 司祭からシンハラ語で歌う「マリアの賛歌」を習おうとした木川田さんの粘り、などなどこぼれ話がほかにいくつもありますので、またの機会にきいていただけたらうれしいです。

生ける救い主大聖堂



幼稚園の卒園式のリハーサルで・・・

担任の先生が卒園児の名前を呼び終えたあと

「以上、組、男の子 名、女の子 名、計 名」と言った。

～ん????今までこんなこと言ってたんだ。何で男女別の人数を言う必要があるのか?～という疑問がある保育者の頭にわく。話し合いの結果、長年の慣習だったけど、本番では「以上、組、名」に改めた。特に問題はなかった。

新年度、職員室の園児数を書く黒板の文字色が、男、女、計とも白色になっていた。

さて、前は何色で書かれていたでしょう? (ジェンダー課題を考える保育者より)

ジェンダーの
つぶやき

「タリタ・クム」について

「タリタ・クム」というのは、「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイ口の願いにこたえて出かけて行き、死にかかっている幼い娘の手をとってイエスさまが言われた言葉です。(マルコ5:41) 今までジェンダーのために十分に発揮することのできなかった女性たちのさまざまな潜在的な能力や感性や行動力が、神様の祝福によって主の栄光をあらわすためにより生き生きと用いられますようにという祈りと願いをこめて名付けました。(三木メイ)

「第1回日本聖公会女性会議その後」についてのアンケート調査報告

第一回女性会議から早や1年半が経ち、箱根での感動と興奮がうすれつつある方も少なくないと思いますが、今後の活動の参考にさせて頂くべく、「その後」についてのアンケートを実施いたしました。20名から回答があり、貴重なご意見を頂きました。ご協力ありがとうございました。以下、報告させていただきます。

1. 女性会議の報告会をする機会があったか。

あった …… 85% (教会、教区、教区報、婦人会、その他)
なかった …… 15%

2. 課題15項目の中で取り組まれたことは？

- 第一位： 聖書の中の女性の物語を掘り起こし、新しい声や多彩なメッセージに出会っていく。
- 第二位： 私たちの社会と教会で見えにくくされている女性に対する暴力の存在に気づき、犠牲者と連帯する。
- 第三位： 管区に新しく設置された「女性に関する課題の担当者」の働きが重んじられるように連帯する。

3. 課題15項目の中でこれから取り組もうとしていることは？

- 第一位： 日本聖公会全教区において女性の司祭職の正当性が保持され、男性の司祭職と同等に尊重されるよう働きかける。
- 第二位： 「女性の司祭の実現に伴うガイドライン」の改正に取り組む。
- 第三位： 女性が、教区・管区的意思決定機関に勇気を持って入っていく。

4. 1年経った今の気持ちは？(抜粋)

- 男性と女性との間でいろんな場面であるいは将来についての展望、現状把握において、ズレや相互の理解不足があると思う。相互理解の場が必要ではないか。
- 自分が学習したことを十分広げていないことを反省し、これから少しでも共に活動する人を見つけて、連帯して行きたい。
- 神学院で学びながら、「女性」「性的少数者」をテーマに色々考えている。今からもずっと女・男・性的少数者・外国人が共に生きられることを心かけて行きたいと思う。
- 会議以後、我々が正に、男性社会の中で生きているということ益々強く感じるようになった。

- 良い会だった。聖公会女性信徒の自覚を強く持った。未出席の方々に是非出席して欲しい。
- 女性会議に集まっておられた方々はどうしておられるだろうか？ 直接会って問題を分かち合う機会をもてないと、毎日の仕事に追われる日々でゆっくり考えられないが、それでも、男社会の中で女が働くしんどさは日々感じている。私は、今与えられている現場で、できるだけ問題意識をもって頑張ろうと思っている。
- 何度もケーテ・コルヴィッツの絵を思い出し、自分自身を奮い立たせている。女性会議からは今でも大きな励ましをいただいている。

5. 次回の女性会議でぜひとりあげてほしいテーマや内容

様々な提案を頂いたが、中でも「セクシュアル・ハラスメント」、「ハラスメント全般」、「セクシュアル・マイノリティー」、「男性からのアプローチを含むジェンダーの問題」が多かった。その他、あらゆる社会問題（軍事化の反対、移住(労働)者、若い、尊厳死、ハンセン病患者の差別、貧困、海外の女性達の課題など）や「日本の文化とキリスト教」、「家族」、「若い人を教会に」といったテーマが挙げられた。

6. 次回の女性会議を開くとしたらどこがよいか？

交通の便が良く、より多くの人に参加しやすい所、次回は関西地方といった意見が目立った。具体的には、「京都教区」が最多数。神戸・横浜という希望もあった。

7. その他のご意見（抜粋）

- ジェンダーの問題は男女が一緒に考えるべき。女性会議にも男性がもっと気軽に参加できるようにし、プログラムも男性と一緒に考える必要があるのではないか。
- 女性会議は、女性のみならず男性も性的少数者も参加し、一緒に分かち合う場であるのに、もっと良い名前は無いかな？女性が中心になることはとても大切であると思うが、「女性」という表現が気になる人々もいるだろう。
- 女性司祭の司牧教会を輪番のようにして、聖餐式を定期的に持つことは出来ないか。女性司祭の司式を経験する人を増やしたい。
- 現在、女性聖職者の置かれている実情を知りたい。また他教区の教会での女性司祭に対する取り組みをもっと知りたい。
- 教区・教会でどうしても孤立し、力を失いそうになる。例えば月1回、隔月でも、女性達の礼拝を、教区を超えて持つことが出来ないか。

ジェンダープロジェクトより

2008年を迎えました。ジェンダープロジェクトが発足して6年目にはいりますが、今年には日本聖公会で女性の司祭按手が認められて10年目の記念の年です。まだ10年しか経っていないのか……もう10年も経ったのか……いろいろな思いの方がおられることと思いますが、その後、日本聖公会の女性の司祭が飛躍的に増えるというような状況には至っていません。むしろ、女性の司祭をめぐる課題が顕著になってきているのかもしれない。10年という節目の年。現状を把握しつつ、現在のジェンダープロジェクトの重点目標である「女性の司祭の正当性を保持する」という課題に向けて取り組んでいきたいと思ひます。

また、セクシュアル・ハラスメントに関する意識調査(アンケート調査)を全教役者と各教会信徒の方に依頼すべく現在準備を進めています。セクシュアル・ハラスメントは「教会では起きるはずがない」と思われている事柄です。アンケートという形式に抵抗のある場合もあるかもしれませんが、私たちの教会の課題を見出すためにぜひご協力いただきたいと考えています。他には、第2回聖公会女性会議の開催を視野にいれて、準備を始めたいと思ひています。できれば、2009年の開催をめざしたいと思ひますが、これは希望的観測です。第1回会議の成果や評価を土台に、次なるステップへ進むことができるよう丁寧な準備が必要であると思ひます。そのためには、ジェンダープロジェクトのメンバーだけでなく、多くの方々とのネットワークがとても大切です。いろいろな立場から、いろいろな地域から、たくさんの方々の声を聴きながら今後の活動をすすめていきたいものです。一番大切なことは、一人ひとりの立っている「場」であると思ひます。その「場」からの声と共に歩んでいけるよう、今年もどうぞよろしくお願ひいたします。

最後に、今号では女性会議のアンケート結果を掲載していますが、回収率は約20%(20名)と決してよい数字ではありません。結果を読んで、アンケートの未提出を思い出された方は、今からでも遅くありません。ぜひお送りくださり、より多くの意見を聞かせてください。どうかよろしくお願ひします。

女性デスクより お知らせ

■今年の世界祈祷日は3月7日です。

テーマ 天上の知恵 - 新たな理解 ~ ガイアナからのメッセージ

『世界祈祷日』は、1887年アメリカの長老派の女性たちが移民その他圧迫されている人々を覚えて祈ることから始められ、今では、世界の170の国と地域で守られています。毎年ひとつの国・地域の課題を覚えて祈りをささげますが、今年のテーマ国は南アメリカ大陸

の北海岸にあるガイアナ協同共和国です。同国は、17世紀から長年にわたって植民地として支配を受けた歴史があり、1813年以来、「英領ギアナ」として知られるようになりました。その後独立し、国名を「ガイアナ協同共和国」と改めたのは1966年のことです。「ガイアナ」とは先住民の言葉で「豊かな水のある土地」という意味で、ナイアガラ瀑布の5倍の高さを誇るカイエトゥール滝をはじめ、大河や湖、緑豊かな熱帯雨林に恵まれた国です。(NCC女性委員会ホームページ参照)世界祈祷日の式文は、毎年そのテーマ国の方々が長い時間をかけて作成され、さらに、世界中で一致して祈るために各国のことに訳されます。日本では、式文の翻訳、準備と実施、奉献、報告まですべてNCC(日本キリスト教協議会)女性委員会の責任で行われており、1932年以来1945年を除いてずっと守られてきました。是非、ご自分の教会や地域の教会などに呼びかけて世界の人々と共に祈るひとときを持ちましょう。日本語式文、英語式文、点字式文、こども式文、ポスターなどは、NCC女性委員会にお申し込みください。(各100円)

問い合わせ・申し込み先

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18-24 (03-3203-0372)まで

■今年の献金の用い先について

世界祈祷日の献金は、式文を作成したテーマ国・地域に送られるほかにニューヨーク本部を支えるため、また世界祈祷日に加わる各教派、団体が申請するそれぞれの活動・事業などに用いられています。日本聖公会では、これまで皆さまに献げられた献金の使途について、日聖婦の役員会で討議していただきNCCに推薦してきましたが、昨年から管区に女性デスクが設置されましたので、今後は女性デスクが呼びかけて聖公会の各女性団体・グループなどから構成される「団体協議会」(仮称)においてその用い方について話し合っ決めてことになりました。2007年度は、協議会設立前ということで女性デスクが『ハラスメント防止に関するプログラム・教材作成のための日本聖公会女性デスク協働プロジェクトチーム』の働きのために使わせていただくことを決定し、申請しています。

<お知らせ> 今年の国連女性の地位委員会とIAWN会議への参加について

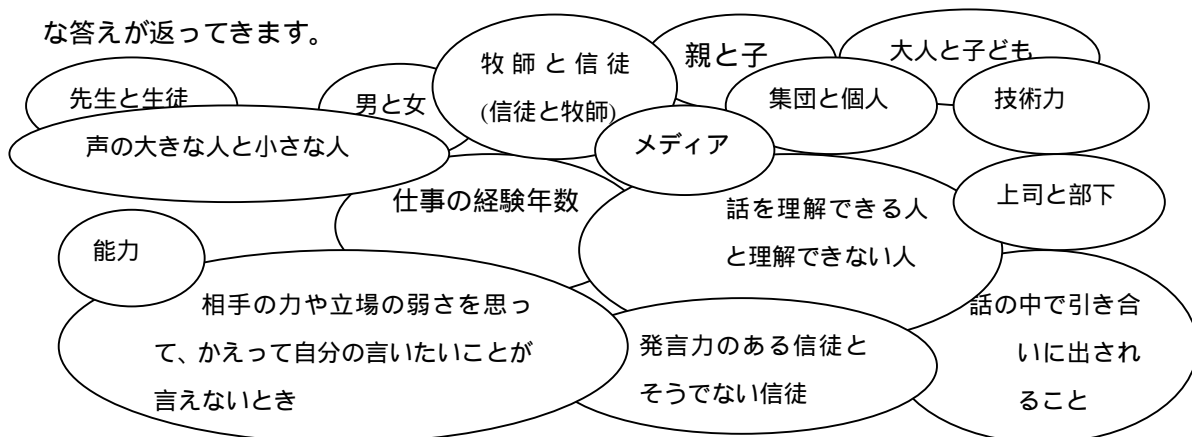
2月末～3月初旬にアメリカ、ニューヨークで開催される第52回国連女性の地位委員会とIAWN会議に、日本聖公会から木村夕子司祭(北海道教区)と千松清美さん(大阪教区)が派遣されます。今回の国連会議の優先テーマは、「Financing for gender equality and empowerment of women」で、日本語に訳すと「ジェンダー平等および女性のエンパワメントのための資金調達」ということになります。周縁に押しやられがちな女性の課題をメインに据えるために、それに関わる資金調達をどうすればいいのか、約2週間、各国の代表者やNGO(IAWNもNGOの一つとして会議に参加します)が話し合います。

“ハラスメント” を 考える (下)

最終回となりました。今回は、ハラスメントの防止をこれまで皆さんと一緒に考えてきた中で私たちが大切だと思ったことをお伝えしたいと思います。(管区女性デスク)

■ 『力の差』について考えること

ハラスメントは力の差のあるところどこにでも起こり得ます。では、力の差とは例えばどんなところに現れるのでしょうか?・・・とワークショップなどで尋ねると例えばこんな答えが返ってきます。



・・・なるほど力の差は実にさまざまに現れるようです。これらの答えを眺めながらワークショップでは「自分には平気なことでも相手にはそうでないこともある。」「それがハラスメントになるかどうかは相手が基準というなら、結局は相手との関係の中でひとつひとつ自分で考えていくしかない。」「必ずしも力自体が人を抑圧する道具とはならないと思う。問題は、その力をどう使うかでは?」などいろいろな意見が出ます。

ハラスメントを防止するには、現実の社会や組織や集団の中で、自分の力が他者の上になんか働いているかを自覚することが大事ではないでしょうか。

“アサーティブ”なコミュニケーション

またこんな意見も結構聞かれます。「日常のささいなハラスメントのことばかり気にし過ぎてはコミュニケーションがぎすぎすしたものにならないだろうか。考えすぎの弊害の方が大きいのでは?」・・・しかし、考えてみればそれが「ささい」なのかどうかは、相手の言動を受け取った人以外には決められませんし、また互いに自分の主張を取りあえず伝えてみることができるぐらいなら問題はそう複雑にはならないのだと思います。

私たちはより良い人間関係をつくるためにどのように人とコミュニケーションをとっていけばいいのでしょうか。

アメリカでは、基本的人権の考えや女性解放の運動などが広まってくる 1970 年代頃か

ら、相手を尊重しながら、自分の意志や気持ちを相手に率直に伝えるコミュニケーションの方法が考えられてきました。その方法を“アサーティブ”(assertiveあるいは名詞形で assertiveness, assertion)と呼び、辞書などでは「自己主張する」などと言う意味で載っていますが、ここで紹介するのは、自分も相手も大切にすることをコミュニケーションの方法のことです。しかし実はいつも私たちがアサーティブでいられるには“練習”が必要です。なぜなら、私たちには、赤ん坊の頃から大人になる過程で身につけてきたコミュニケーションのパターンがあるからです。例えば、相手を優先し過ぎて肝心の自分の考えや気持ちを伝えられなかったり、また相手に能力がないと思われたくないと思って必要以上に力んでしまったり、伝えた結果、相手との関係がこじれるのが心配で結局一番言いたいことが言えなかったり、遠回しの「ノー」がかえって相手を傷つけたり、ほめられたのに素直に受け取れなかったり、批判に落ち込み過ぎたり・・・というふうに。この自分なりのコミュニケーションのパターンによって、私たちは相手に対して攻撃的になったり、自己犠牲的になったり、作為的になったりすることがあります。アサーティブなコミュニケーションは、「私は、私でいい」という考えを土台に、私たちには「誰からも尊重される権利」があるし、「他人の期待に応えるかどうか(自分で)決める権利」や「申し訳ないと思わずに断る権利」や“「わかりません」と言ってもいい権利」、「考えを変えてもいい権利」、「自分の感情を言葉で表現する権利」などを人との関係の中で実現していく方法です。自分のコミュニケーションの方法について一度見直してみることも大事ではないでしょうか。

(『自分の気持ちをきちんと伝える技術』(平木典子著 PHP 研究所)参照)

新しい人間性を求めて

これまで力の差に伴って、私たちは差別を受けたり搾取されたりあるいは社会の中で当然とされている慣習や文化の中で自分の存在を軽くされたり、性の対象としてだけ見られたり、まるでそこにいないものであるかのような扱いを受けることがありました。

しかし、聖書の中で私たちは、そんな社会から疎外されていた人々が、自分と同じ人間として相手のつらさや苦しさをみつめる、そしてその人が持つ回復の力を信じるイエスと出会うことで自らを見だし、その生き方を変えられていく物語と出会ってきました。自分は条件なしで神に愛されている、そのままに尊重されるべき存在であり、そして、自分がどうしたいかは自分が決めていいのだと知ることは新しい自分の発見です。そうして例えば女性たちは、イエスと共に宣教の旅に参加することを自ら決めました。

私たちの新しい人間性を求める旅は、いつか完成するものというよりは、イエスもまたそうであったように出会った人たちと手探りしながら、理解と信頼を深めるプロセスそのものなのかも知れません。

シリーズ「聖書の中の女性たち」

エフタの娘 士師記 11 章 - 12 章

***** 松浦順子 (東京教区)

物語はイスラエル王国が成立する前「ギレアドの人エフタは勇者であった」と始まりま
す。しかしエフタは出自への差別から「兄弟たちを逃れて」家を出てならず者と暮らして
いたとあります。そのときアンモン人との戦争が起こり、エフタは出身部族の指揮官とな
るよう要請されます。彼は勝利したら部族の頭になることを条件に引き受けます。そして
主に誓いを立てます。もし戦いに勝ち無事帰還したら、そのとき「家の戸口で最初に自分
を迎える者を主のものといたします」と。生け贄として捧げるというのです。戦いは勝利
に終わり、帰還した彼の前に「太鼓を打ち鳴らし踊りながら出迎えた」のは、何と彼のた
った一人の娘でした。彼は娘をみると「お前が私を打ちのめし、苦しめる者になるとは」
と嘆きます。そう言いながら、彼は娘の命より自分の名誉、権力の座の獲得を優先させま
す。名前も記されていないその娘は、父親に主との誓いを果たすように、しかしその前に
二ヶ月の間自分を自由にしてほしい、友達と一緒に山々をさまよひ、自分が「処女のまま
であることを泣き悲しみたい」と求めます。彼女は出かけてゆき、二ヶ月の後に父親によ
って「主にささげ」られます。その後イスラエルでは、娘たちがエフタの娘の死を悼んで
毎年四日間家を出るというしきたりができました。この物語には幾つもの興味深い、考え
てみたい要素がありますが、今は娘と友人たちのことを考えてみます。

旧約聖書には、女性が圧倒的な暴力に苦しめられ、ついには殺されるような物語が他に
もあります。私たちはその残酷さ忌まわしさに驚き、何故このような物語が「聖書」に記
されているのか理解に苦しみ、怒りさえ覚えます。その疑問に答えて、ある時一人の女性
の聖書学者は、聖書は歴史ではなく人間の姿、そして神との関わりを描きだしているのだ
といわれました。この物語も父親に絶対服従する従順で、献身的な娘を賞賛し、模範とす
べき姿として従来読まれてきたと思われます。しかし、旧約時代のイスラエルでは未婚の
娘は父親の所有物であって、自ら物ごとを選択し、決定する自由は持ちませんでした。父
親に従うしか選択肢のない若い女性にとって、その不合理な死の前に二ヶ月の猶予を求め、
さらに友達の女性たちと「山々をさまよひ自分が処女であることを泣き悲しみたい」と申
し出るとは、並外れた自発性の発揮、隠された挑戦を含む勇氣ある行為ではなかったで
しょうか。どのようにこの二ヶ月を過ごしたのか、聖書には何も書かれていません。女友
達はこの悲劇を決して人ごととは考えなかったでしょう。未婚の女性であれば自分にもど
んな運命が降りかかってくるかわからないのですから。二ヶ月の共同生活を過ごした彼女

たちは、互いに姉妹としての絆を強め、一人の姉妹の避けられなかった死を決して忘れないと誓ったことでしょう。それから来る年も来る年も、年に四日間イスラエルの娘たちは家を出てエフタの娘の死を悼むしきたりができたというほどに。忘れないことこそが犠牲になった者への愛と連帯の証であり、決して起こってはならない忌まわしいことがらを根絶するための闘いが、そこから始まると彼女たちは信じたのだと思います。

この物語は、2000年12月、民衆の法廷として開かれた日本軍「慰安婦」問題を裁く「女性国際戦犯法廷」のキリスト者の準備集会「なぜキリスト者がこの民衆の法廷に関わるのか？」において、プログラム最後の短い礼拝で用いられたテキストであり、その礼拝の主題は「忘れないことは救いである」でした。人間の歴史の中で戦争はいつでも最大の暴力です。なかでも子どもや女性は最も激しい暴力を受けます。「慰安婦」とされた女性たちは太平洋戦争中、組織的・構造的な暴力の餌食となりました。「女性戦犯法廷」ではそのことを明らかにし、責任はどこにあったか、何故そのような構造が作り出されたのかを検証しようとしたものです。折しも「すべての暴力を克服する10年」が始まろうとするとき、多くのキリスト者女性たちがこの市民による「法廷」開催に、協力あるいは中心になって関与しました。この問題は終戦から60余年を経て被害女性たちが次々世を去る中、今日まで未だに解決をみていません。残された数少ないご本人たちとその「姉妹たち」のこの事実を決して忘れない闘いは、在韓日本大使館前を中心として、世界各地で続けられています。

言うまでもなく、忘れられてはならない暴力の形は他にも多くあります。一人の人がそのすべてに関わることは不可能ですが、それぞれ自分にとって一番身近なところで、感性をときすまし、耳目を開いて、傷つき、あるいは命さえ奪われて声を上げることのできない姉妹・兄弟の声となることを、この物語は読者に求めてはいないでしょうか。

♪ ♪ Book Review08

評者：吉谷かおる

*ジョン・アーヴィング『また会う日まで』上・下、
小川高義訳、新潮社、2007年、各2,400円+税

*竹下節子『「弱い父」ヨセフ キリスト教における父権と父性』
講談社選書メチエ、2007年、1,500円+税

*郷富佐子『パチカン ローマ法王庁は、いま』
岩波新書、2007年、740円+税

*ロジャー・パルパース『新バイブル・ストーリーズ』

柴田元幸訳、集英社、2007年、1,900円+税

新春の大読書には、ジョン・アーヴィング『また会う日まで』でしょう！見返しに「現代アメリカ文学最強のストーリーテラーによる怒濤の大長編！」とあるくらいなので、読むほうにとっても分量的になかなか骨が折れますが、この作家のテーマである「父親探し」が一応の完結をみた畢生の自伝的大作ということで付き合う価値はあります。主人公ジャックの幼年期、からだ中に楽譜の刺青を彫りこんだ教会オルガニストの父を追いかける母に連れられ、刺青師と教会のネットワークに助けられながら北海の港町をめぐる序盤は楽しいです。その記憶は30年後に再び父探しの旅に出たジャック(女たらしの俳優に成長)により検証されることで思いもよらない姿を見せることになるのですが、『また会う日まで』は「またおーおーおー日まで」だったのだな、と思うといっそう味わいが深くなります。

さて2007年、株をあげた人さげた人いろいろあったかと思いますが、一番の注目株はヨセフさんだったのでは。2000年も前の人ではありますが。クリスマス前に公開された映画『マリア』(2006年)では、原題の『誕生物語』が『マリア』に変えられてはいるものの、「このヨセフって人はなんていい人なんだ」と誰が見てもわかるように作られていました。「イエ

スの養父」ヨセフは、カトリック教会の伝統ではマリアの処女性を強調するために、生殖能力が衰えていそうな高齢男性とされ、評価が高まる前の13世紀までの絵画では聖母子のかけにさえない表情でたたずんでいることが多く、長い間立場のない人であり続けました。女子学生に誕生物語の感想を書いてもらおうと、事情がよくわからないからではありませんが「マリアと縁を切ろうとするとはひどい」と約半数が非難します。しかしこの『マリア』では、まだ若く素朴で思いやりがありマリアを大好きな男としてのヨセフが描かれています。(この作品は、映画としてとくにすぐれているとか斬新な解釈が見られるということはないのですが、ロケ地にも登場人物にもパレスチナらしさが出ており、聖書のエピソードを無理のない範囲で丁寧に映画化したという意味で好感がもてます。)

そのヨセフをフィーチャーした竹下節子さんの本が今年の夏に出ていました。『「弱い父」ヨセフ キリスト教における父権と父性』がそれです。竹下節子さんの著書は、例外なく面白いので、全部が「買い」なのですが、講談社選書メチエからは前に『聖母マリア』『知の教科書 キリスト教』が出ています。この本の刊行で

マリア、イエス、ヨセフの聖家族を揃えるという著者の希望がかなったことになるそうです。本書は、今日のカトリック世界では押しも押されぬ大聖人、すべての「父」のモデルとなっているヨセフについて、聖書にほとんど言及すらされないという立場のなかった時代からの変遷をたどり、現代に必要とされている「父」のありかたをさぐるものです。「強い父」ではないヨセフはやさしさのシンボルであり、彼のした最大のことはイエスを受け入れ、子ども時代にそばにいてやったことだ、として強権的父親像(それは今日の世界ではアメリカと重なる)に辟易した私たちに新しい「父」像が提示されます。学校で家庭で教会で、私は「父なるもの」にぶつかっては嘔み付いたり尻尾を巻いたりしながら生きてきました。しかし本書により「ある人がまだ弱く小さい時に、その存在を肯定し受け入れることで、母親以外のすべての人がその人の父になれるのだ」とまで「父」が広げられたことで、男ではなく親でもない私にできることもあるのでは、と柄にもなく感動を覚えました。

ところで強権的父親というと、ずばりローマ法王、という連想が私には働くのですが、人によってはパパ様こそはやさしさのシンボルだ、となるのでしょうか。ベネディクト 16 世のご本名もヨーゼフです。朝日新聞ローマ特派員が揺れるバチカンの裏側を紹介した『バチカン ローマ法王庁は、いま』は、その歴史や組織、

今日的な課題もわかるという重宝な一冊です。著者の郷富佐子さんは、現在は東京在住のようですが、ローマ支局勤務のあいだに前法王の帰天、コンクラーベ、新法王の誕生に立ち会いました。今後もきっと活躍されると思いますが、この著者がフセイン政権崩壊後のイラクへの応援取材に行きながら、バチカニスタと呼ばれる世界中から集まったベテランの担当記者にもまれつつバチカンへの取材を敢行するのを読んでいると、声援を送りたくなるというなんだか珍しい新書です。ジャーナリスティックな視点から書かれた本書は、竹下節子さんもそうですが、キリスト教について知識と理解はあるけれども信徒ではない、という人が書いたものなので非常に中立的で気持ちよく読めます。教義において超保守的だった前法王の路線を継承しているとされる現法王が、不妊治療、避妊、中絶、同性愛、離婚、安楽死、女性聖職などについて画期的な発言をするとは考えられませんが、お膝元のイタリアではバチカンの方針がどのように受け止められているのでしょうか。「家族の価値」について、なぜバチカンとアメリカの右派はそっくり同じことを言うのだろう、というのは私の疑問なのですが、少なくともカトリックの女性たちの中にはバチカンの言うことは時代遅れだ、と考える人たちがいるようです。カトリック教会の課題の一つ、「現場の教会や信者たちの視点に立ち、現代の社会にどう対応していくか」(もう一つの

課題は「他宗教といかに対話を進めていくか」にどんな取組みがなされるのか今後とも注意したいと思います。

最後にニューイヤー・プレゼントといえそうな本を一冊。日本一「この人が訳しているのなら読んでみようかと思わせる翻訳者」柴田元幸さんが訳した『新バイブル・ストーリーズ』が暮れに出ています。著者ロジャー・パルバースさんはNY生まれでオーストラリアに帰化した人で、主に日本に住んでおられるらしく、作家、演出家、詩人、翻訳家など肩書きもたくさんで、ようするに旅人かと思われま。この本は聖書にある物語を「みんなの物

語」に戻すために語りなおす試みのひとつの成果です(しかも美しい)。本書で語りなおされた物語は順に、ノアの箱船、バベルの塔、壁の文字、ダビデとゴリアテ、サムソンとデリラ、スザンナ、ヨブ、ヨナ、よきサマリア人、ヨシュア、ヨセフ、エステル、アダムとイブ、でした。女性像が秀逸ですが、とくに「よきサマリア人」の章ではびっくり清新な驚きが。聖書の物語はいつ、誰が語りなおしてもいいみんなの物語であることに気づかせてくれるけれど、ここにはアメリカの状況が垣間見えます。いま私たちが語りなおせばいまの私たちの物語ができるでしょう。

ジェンダープロジェクトの活動に関するお問い合わせは、下記にお願いいたします。

大岡左代子 073-422-0055 Fax 073-436-3333

正義と平和委員会・ジェンダープロジェクトは、教会におけるジェンダー問題の共有と女性たちの新しいネットワークづくりのために、機関紙として、ニュースレター『タリタ・クム』を発行しています。(年3～4回発行予定) 女性の方々はもちろん、ひとりでも多くの皆様にこのニュースレターを読んでいただけたら幸いです。よりよい紙面にしていくために、ご意見・ご感想をお待ちしています。今回お届けする2008年の新年号には、女性司祭按手から10年目となる年を迎えるにふさわしく、私たちの意識に見直しを求めるような問題提起の含まれた記事が揃いました。また、新年こそは平和な年にと誰もが願っていたはずの年末には、ブット元パキスタン首相暗殺の一報に衝撃が走りました。戦乱の続く世界のことも紙面を通じて皆様と一緒に考えていければと思います。寒い時期ですが、どうぞお元気で過ごしてください。(吉谷)
